

その14: ロシア・カムチャッカへのクルーズ船添乗と、 船中での講師の旅

今回のご紹介は、頼まれてのクルーズ船添乗です。

「日本クルーズ客船(株)」の「ぱしふいっくびいなす」号(旅客定員620名・乗組員約210名)で、右の様な旅を。



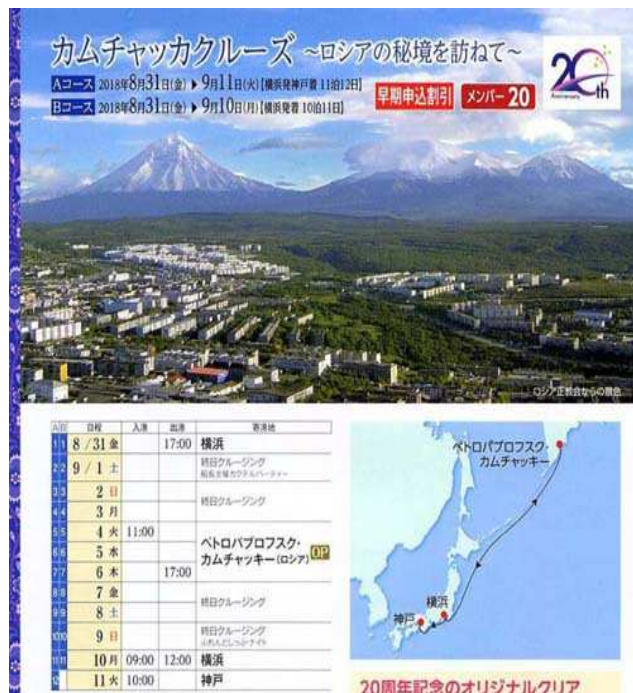
(旅客乗船準備中の船内7階エントランスと、オープンバー)



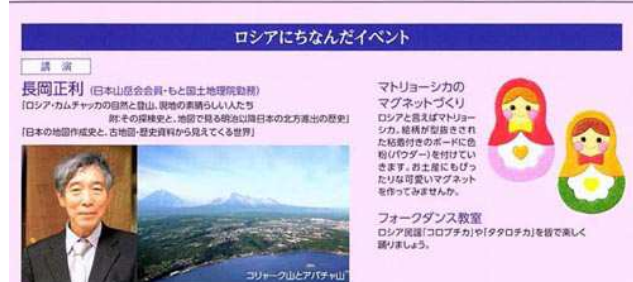
(横浜大桟橋から、見送りを受けて出港。)

色んな経緯がありまして、わが奥様も講師アシスタントでの
乗り組みとなりまして、日本からは11日間も隔絶された
生活。毎日が割烹料亭と高級ホテルでの食卓の様で、往
復洋上での計4回の講演と、現地カムチャッカの山での
ちょっとしたご案内だけで、後はまったくご自由に、と
いう日々でした。以下、どうぞ、写真にてご覧下さい。

下は、出航後の幹部船員挨拶と、7階エントランスにての華やかな演奏。同階オープンバーとツアーデスクでの。



(クルーズ旅程と、長岡登場ページ：同社パンフの一部)



(クルーズ船内の賑わい：同社パンフの一部)





(依頼講演の1回目：右は、その冒頭スライド。)



頼まれたのは、カムチャッカへの往路で2回の講演(上写真：復路でも追加2回)でした。

船は、ロシア・カムチャツカ地方の首府「ペトロパブロフスク・カムチャツキー」(左図：アバチャ湾の内奥にあって、対岸にはロシア太平洋艦隊の基地)に接岸。2泊の係留中は、ロシア領土と同様の扱い(ロシアの法令が適用)となって、船内にはロシアの国旗が。

ビザ(査証)なし渡航の扱いとなりまして、工事の中の岸壁へロシア官憲が出張(下写真)なされて、下船時のパスポート入国押印のみ。入出国管理ビルは工事中・素通り(下右写真)で、壁面の表示文字からは、今後の、露本土・米・中・日からの大勢の来訪客が期待されているらしい、新開地の様子でした。

クルーズ船の旅での、カムチャッカ上陸はペトロパブロフスク市内と、希望者はアバチャ山の中腹散策へ。(地図は、ソ連邦参謀本部50万分1地形図の一部)



準備されていたオプションツアーには参加しない小生らは、市内へ適宜散策に。下写真はロシア正教の木造小祠堂。僻遠のこの地では、いまだ、信仰も健在の。

右下は、市内の「自由市場」(ソ連邦時代の呼称)での豊富な海産物で、価格数値は1 Kgあたりのルーブル金額です。100Rubが、邦貨約¥200。日本では味わえない様な、見事な干物でした。



オプションのアバチャ山麓、花の散策に同行。花の名でしたら、小生も少しは役に立ちます。カムチャッカは、既に秋です。もう新雪の来たコリヤーク山(4321m)と、アバチャキャンプ。火山の広大な山腹斜面にはまだ残雪が多い中で、消えた雪渓沿いの谷間にはまだまだ花が。



日本の高山帯でよく見る花々が、消えた雪渓沿いなどでは、まだまだ咲いておりました。上中央の花、インディアン・ペイントブラシは、ここから北米にかけて分布。その次がエゾツツジで、右上のハクサンイチゲから下のコケモモまで、日本の北アルプスの各地で、普通に見られる花々です。右はロシアの民芸品、入れ子構造(同じ形・模様の人形が少しずつ小さくなって組み込まれている)のマトリュシカですが、よく見ますと、プーチンさんが居心地の悪そうな顔で。左下隅にはヨシフ・スターリンさんの人形も覗いています。



口約束・お世辞ながらの、「大変好評(参加旅客400名弱)につき、3年後にも再催行を」の筈は、コロナ禍収束近い雰囲気の中での突然のウクライナ侵攻で、「ロシアへ」は、思いもよらぬ水泡と消えました。下の写真は、前々回のカムチャッカでアバチャ山頂(2741m)同道の、オリガさん。



皆さん、どうなさっていらっしゃるかなあ？



ここで、念のためのご説明を: 拙稿ページは、全部を筆者が作ったものです。2年前に、投稿は個人4ページ・支部8ページ以内、写真は1ページにつき2枚まで(その挿入編集に手間を要す故か?)とお定めになりました。じつは以前からですが、編集の労の低減に資するようにと、拙稿は上述のように自身で編集してPDFで提出しております。それゆえに、規定とは関わりなく写真がたくさん掲出のページとさせて頂いております。

なお、毎号の執筆ご常連各位にも、「写真沢山の稿の編集お引き受け可」との事前ご連絡を差し上げました。

(一連の稿は、KUWV-OB会のHP中、「会報Web版」からご覧頂きますと、カラーでの閲覧が可能です。)

HP上でご覧頂く場合は、拡大してご覧下さい。拙稿挿入写真はA3でご覧を前提の解像度です。

乗船の「日本クルーズ客船(株)」の「ぱしふいっくびいす」号は、<https://www.venus-cruise.co.jp/#1>

アバチャ湾内・洋上での全周眺望: 11期OB-加藤様によるWeb掲出 <http://urx.blue/YS2R>

『やまざと』近年号では、毎回、外国の山歩きなどを紹介させて頂いておりました。
日本にもこだわりを持っている地は色々ありまして、下は、郷里すぐ近くの、高校生時代からの。

セッションⅣ

日本山岳文化学会 17 回大会 2019.11.16-17 一般講演
(東京慈恵会医科大学・高木会館 2 号館にて)

神仏習合の面影を今に残す五箇山白山宮「33 年御開帳・式年大祭」の報告

長岡正利

演者は本学会 2016 年大会で、天正年間の一向一揆や明治の廃仏毀釈を経ても現代に遺った白山信仰の諸仏(うち重文が 2 点)などを紹介した。また、昨 2018 年の本学会では、伝承に拠る白山開山(養老元年、越前の修験僧・泰澄)から 1300 年目(2017 年)に、福井・石川・岐阜県などの関係の各地で華やかに催された白山開山 1300 年祭のもようを紹介した。

古来の白山信仰(白山修験)は、天台密教系の、神仏習合のかたち(十一面観音菩薩を本地仏とし、その垂迹神が白山(妙理)大権現)であった。しかし、全国におけると同様に、慶応 4 (1868)年 3 月の神仏判然令(分離令)によって、神社と寺院の分離独立とその僧侶の還俗や、仏像を御神体とすること等も禁じられた。だが、一方では、^{ごがやま}五箇山の白山宮(富山県南砺市上梨^{かみなし})では、神社ではあるが、その「本尊」に「秘仏・十一面観音菩薩」があつて、近年は 33 年ごとに開帳がおこなわれてきた。今年 5 月のそのもようを、多くの写真で紹介する。

この白山宮は、伝承に拠れば、白山開山の泰澄が人形山に白山菊理媛命^{しらやまくくりひめのみこと}を勧請・建立したものといわれ、後に現在の上梨聚落に移設して、文亀 2(1502)年に再建されたもの(棟札の記述による)で、国指定の重要文化財である。



白山宮の鳥居前には御開帳標札と、重文説明にもその旨が。



御開帳の早朝に、拝殿と本殿精堂の板戸を開放。右は、本殿正面上の、鎌倉初期の様式の蛙股。



御開帳が始まって、



五箇山各地から到着の獅子舞が、次々に奉納される。



拝殿では子供達によるこきりこ舞を奉納。



地域の人達が、正装で、次々に御開帳を拝観。右仮設で宝物展示。

開帳については、養老元(717)年の泰澄による創祀と伝わる平泉寺白山神社でも 33 年ごとに行われてきており、次回は 2025 年である。

一方では、若き日の泰澄が遙かに白山を望んで登峰・開山を志したと伝わる^{おちさん}越知山大谷寺(福井県越前町大谷寺)での開帳は不定期(近年では 1940・55・66・72・87・2003 年)で、この 11 月 2・3・4 日に秘仏多数の開扉が予定されている。

- 【文献】平泉澄編『泰澄和尚伝記』。白山神社蔵版(1953):『藝林』Vol.66-2(2018)に再録版あり
越中白山宮奉賛会『白山宮修理工事報告書』。同会(1954)
越中五箇山平村史編集委員会『越中五箇山平村史』上・下巻。平村(1985・1983)
越中五箇山筑子唄保存会編『こきりこーその由来と歴史ほか』。平村(2001)
平泉隆房「白山信仰をめぐる諸問題」、『藝林』Vol.66-1(2017)